

## ミシュレ史学の地位

長, 壽吉

<https://doi.org/10.15017/2244043>

---

出版情報 : 史淵. 100, pp.1-10, 1968-03-01. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# ミシュレ史学の地位

長 寿 吉

『Genie』のシャトオブリアンはその『歴史研究』のうちで、史書の種別を哲学的と敘述的とに記しているが (Études historiques) この詩人の言は、世紀を通じてそのままに長くつづいたとは言え、そのうちにはシスモンディのような堅い哲学的もあり、バラントのような美しい文学的もあつた。史学はまさに哲学と文学との境界なき境界である。シスモンディは「哲学なしの事実の探究は、事実なしの哲学の探究より誤りが多い」と、頗る明確に言い切つて居て (Hist. des Français. t. IX, 1826) バラントは『ブルジョアニク侯史』に度々表現の苦心をくり返していたという (Louis Halphen, L'Histoire en France depuis cent ans. 1914)。

古代思想のエトスの三角の底辺が考えられる境界なき境界が、世紀初に歪曲を生じて、二〇年代に於ける「サンスウル」的言論旺盛の影響を被つて、シスモンディ的に盛んになり、ヴェリイの作品も、アंकティルの作品も殆んど一笑に付して顧みられず、ドロイゼンの如きまでもが、「史学は歴史敘述のポエティックでない」と、不明瞭ながらも論証的を文学的から遠ざける言を洩らしていた (Droysen, Grundr. d. Historik)。また史学の描写は、結局は「余計な心配」とする傾向までが生じていたのである (“un soin superflu”)。このうちでジョゼフ・ミシュウの『中世フランス史』特に十字軍史だけが、省みられたと伝えられるが、同書は寡聞にして私はまだ観る機会がない。察するところ、「何故に」だけが強調されるに従つて、所謂 “Comment les choses se sont passées” という、むしろ雑純なものが忘れられる先験的傾向のあ

まりの大きさに、一種の倦怠さえが覚えられる時も近づいて来たのであろう、境界なき境界の反省も伴い来るのである。論証史学の人々を *Fatalistes* と称したのはやや誇張に類したとはいえ、その歴史発展に関する必然性また論理的連絡の思想が、史学研究を促し、また殊に史料蒐集の誘導となつたことは明らかである。ティエールと云い、ミネエと云い、さらにギゾオに至るまで、同様の業績が認められる。<sup>(1)</sup> 然し、「一たび変革が必要とならば、そしてそれをなしとげる時が来るならば、何ものも妨げるものなく、総てはその利用となる」<sup>(2)</sup> (Mignet) とは深刻な哲学的思索の傾向を示すと同時に、人智を以て総てを解釈しようとし、既定観念の解釈を独断に導き、先験を却つて真相解明の前に支障たらしめる傾向までも生じていた。因に(クロウド・ベルナル編中世フィリップ・オウギュスト時代から十七世紀初に至る覚書集一三二卷一八二九年)(ギゾオ編十三世紀に至る覚書集三二卷)(ジャン・アレクサンドル・ブュシオン編俗語に由る十三世紀—十六世紀国民年曆集四七卷一八二九年完)等は、この時期に於ける著しい業績であつた。

(3) Guizot, *Mémoires relatifs à la Révolution d'Angleterre*. 1826.

(3) Mignet, *Histoire de la Révolution française*. 1824.

二

『史書文粹』のカミュ・ジュリアンは、同書附記の史学史略記(讀井鉄男和訳)のうちで、ギゾオの有名なフランス史に関して、「一史実に理念を発見し、一文献に心情を発見し、一語句に思想を発見せんとする方法」の優れたものであるとしているが、<sup>(1)</sup>これはむしろミシュレの場合に再考されるべきであろうが、当然そこには広汎な史料の蒐集と研究とを要求し、批判考証の結果に於て、史学の必要なる多方面的性質を要求するに至る。例えば、従来多く看過された教会及び教会組織等に及んで、歴史現象が把握されることを試みるが如きことである。

斯く総合し論断し批判し分析する過程は、自づから活潑なる総括と描写とを導き、恰かも眼に見耳にきくが如き、敘述を

必要とするよう誘導される。即ち論断し批判し分析するその前提としての、史実の描写或はその結果としての史実の描写が活潑に換言すれば絵画的に行なわれることとなる。更に換言すれば論証史学と敘述史学との両面がここに生ずるのである。

二十年代三十年代に於ける史学業績は甚多い。或は理念論哲学の伝統もあり、文献研究の伝統もあり、有用史学の一面も存し、総合に至る途も存し、或はギゾオ史学に見られる敘述史学の一面も、既にその徽章を有していたのである。<sup>(3)</sup>所謂ファタリストの業績が、いかに史学全般に対して、実に大きな功績であったことは、忘るべからざるところである。

因みにジュリアンは同書に於て、フランス史学の興趣は二傾向、ティエリイとギゾオとの存在であるという。ティエリイはサンシモニスムから展開して、征服されたるゴウル人の権利を防護して、農民の利益に就いて論証する。

註(1) Extrait des Historiens français du XIX<sup>e</sup> siècle. Camille  
Julian, Notes sur l'Histoire en France au XIX<sup>e</sup> siècle,  
1922.

(2) Considérations sur l'histoire de France, Révolution de  
1830. Son caractère, ses effets, son influence sur ses  
études historiques. L'application de la centralité admi-  
nistrative aux recherches historiques était en quelque

sorte une loi pour la XIX<sup>e</sup> siècle, car elle est, tout à  
la fois, d'accord avec son esprit et avec la nécessité  
des circonstances, etc.

(3) Guizot, Hist. des origines du gouvernement représentatif;  
mémoires à la Révolution d'Angleterre; Hist. de la  
civilisation en France; etc.

### 三

ルイ・アルフマンは『史学百年』に、一八三〇年頃の史学者の普遍的な事業は、史料の探究であつたという (La chasse aux documents)。七月革命が歴史論証、政治批判の結果と、考えられる事態があつたからである。後年の二月革命の時に、ルイ・ブランの『十年史』が七月王国の「城崩し」と称せられたと同様の事態は、七月革命以前の史家の上にも考及ぼされる。ペルリ侯暗殺事件後の復旧王朝の政治に及ぼしたる言論の影響は、史家の活動をして益々史料探究に向かわしめた。

史学は当時最大の学問、史学研究は国民的制度であつた (“une institution nationale”, Thierry, *Considération.*)。

史料は益々多く、その普及は各地の教育機関が史学及び考古学を重要科目として取扱ひ、この状況は西はベルギーに接する地方から、南はカルカッソヌに至る地方、及び南方マルセイユから中部ディション、更に西のアンジエなどに於ける多くの教育機関に於てこれを見るに至つたが、この間に研究方法論も発達しクロード・フランソア・ドヌヌウ(一八四〇歿)をはじめ文書学者の多数が傑出した。ジャン・ボダンの昔を顧れば、実に隔世の観がある。そして歴史家のもののみならず多く著作が史料に由つての業績として発表された。ミネエの『イスパニア王位継承』、キシユラの『オルレアン少女の起訴』、更にプロスベル・メリメエの『ローマ史研究』そしてティエリイの『三級民史論』またミシュレの『タンブリエ起訴』等々がある。

斯くの如き史学の発達進歩の環境に於ては、形態とも云うべき論証と敘述とが、おのづから渾一或は帰一すべき問題として残るべきもの、則ち包括し融合し即ち総合する、体系的なものを樹立することが、残されたる課題として考えられることである。<sup>(1)</sup>まして広汎な研究の範圍夥多な種別の資料の有る当代に於て、これに対する新しき検討と認識とが、必ずや一層に総合的な史学を生ずべきものあるに於ておやである。この間に生じたものがジュール・ミシュレ史学である。<sup>(2)</sup>「歴史の劇的な統合、影像の形を以てする理念、象徴の形を以てする事実」を志すのである。フランス史学は彼に至つて「近代科学的成立」の第一歩を得た。<sup>(3)</sup> (*l'unité dramatique de l'histoire, l'idée présentée sous forme d'image, et le fait sous forme de symbole.*)。ガブリエル・モノオは、ハインリヒ・ハイネがミシュレを評して言つた言葉をミシュレ評価のうちに掲げている。曰く「言語の魔術を以て、過去の墓場の遺骸から、祖先の行為を吾等の眼前に再現することが歴史家の職能に存するとせば、ミシュレこそは本当に歴史家である」と。アンリ・セエは史学理論のうちで、ミシュレを最初の真の史家であると云い、エリヒ・シュテーターは『十九世紀フランス史家の世界的思想』に、<sup>(4)</sup> また殊にグスタフ・ウ

オルフは『近世史研究序論』<sup>(5)</sup>のうちに、モノオの評価を説いて、極めて端的にミシュレの業績を形容して曰く、「モノオはテーヌを哲学者とし、ルナンを評論家としたが、ミシュレは最も微妙なる後世への感覚を残す史家であるとした」と言ふ (am feinsten nachempfindender Historiker)。

- 註(1) Henri Sée, Science et philosophie de l'histoire. der grossen franz. Historiker d. XIX. Jahrh.  
(2) G. Monod, La vie et la pensée de J. Michelet. (3) Gustav Wolf, Einführung in d. Studium d. neueren  
(3) ibidem. Geschichte.  
(4) Erich Steger, Das universalhistorische Denken

#### 四

さてミシュレは何に由つてその史学を成したかという重要な問題について、カミニュ・ジュリアンの言が省みられる。曰く、「ミシュレの精神は、これを要するに哲学とドイツとである」と言い、そして哲学はクザンとヴィコとであるとする。クザンは、「余の若き友人たるミシュレに向つて、ヴィコとヘルデルとをフランスにもたらし奨励したことは余の最も喜ぶところである」という。従つてドイツ哲学に関連する或は祖述するクザン思想とヴィコ哲学との、ミシュレ史学に於ける関係は明らかで、換言すれば、ミシュレ史学の根基は、哲学のヴィコであり、またヘルデルのドイツ即ちヘルデルの詩でもあり宗教でもあるとされる。即ち以前の論証史学者の所謂ジュルマニストとは、大に異るところである。

ミシュレは凡そ論証と敘述との従来の史学傾向に不満であり、彼は彼の哲学と彼のドイツとの上に、当代の史学の普及発達を包括して、総合せんと試みた人である。ジュリアンは従来の史家を称して、*homme de parti* であるとし、ギゾオは制度の上であり、ティエリイは征服されたる国民の上であり、ティエールとミネエとは革命時代の上であるとするが、

それは必ずしも妥当ではないとしても、「ミシュレに至つては *homme d'idée* であり、国民全体を知り、フランスの完結 (*intégral*) な形を望見し、その森林その河川その住民その偉人、その芸術、その政治、その区々たる地域、また度々の革命にも変化せざる永遠の特質を、認めたものである」とする。<sup>(1)</sup>

そしてオスカア・ハアクは「元来彼れミシュレは何等の好奇をも歓喜をも了解しようとはしない。その生涯は一に苦痛の生涯であり、過去の国民の苦悩をなげく深い憫れみで満されている。この心理は彼の著作に表われていた。そして彼の生涯の最も大きな事項は一八三〇年の革命である。この時から、フランス国及びパリはもはや祖国たるのみならず、彼にとりて靈感を与えるものとなつた。彼は『世界史序説』に於てフランスの世界的任務を指示し、また『フランス史』に於て力強い道程、それは正にその光榮に至るべきものであることを提示した<sup>(2)</sup>」と記事している。

註(1) Julian, *ibidem*.

註(2) Oscar A. Haac, *Les principes inspirateurs de Michelet*. 1951.

グウチが『十九世紀史学史』に引用しているミシュレの言を見るに、「ヴィヨは新世界の予言者であり、彼は始めてプロヴィデンスがそれ自身作用する事績を明示した。ポッセエの如き宗教というせまき範圍に於てではなく、自身を社会に由つて人間化するところの人類に於てである」とし、更にヴィヨに従つて「人類はそれ自身のプロメテエであること」、「ユマニテはそれ自身に於て成る事蹟であること」、そして「人類はその社会性に於て、はじめてその存在の本質を得ることを認めたのである」という (*Principes de la philosophie d'histoire*)

註(3) G. P. Gooch, *History and Historians in the Nineteenth Century*.

ヴィヨの人類文化発展の原則としての「人類の *le sens commun* ということ」、<sup>(3)</sup>「各々の文化は各々自身の事業であ

り、何等外部との交渉に成るものでない」と云うもの立って、ミシュレは人類の歴史即ちユマニテの歴史を觀察し、総合しようとする。人間はそれ自身に於て活々として自己を作り、また人間はその社会性に由つて人間性を發展させると彼は考へる。モノオの前掲の書に由れば、ミシュレは「ヴィコの元生命の原理とそれ自身に由つて創生されるユマニテの学説に立って、余の著作も余の教養も成立したのである」と言つたとする。

## 五

文学史に於てランソンが説くところを見るに、「復興王朝の論者（ドクトリネール）はイングランドを賞讃したが、ミシュレはむしろそれを憎んだ。彼はドイツを愛した。彼は観念的詩的感傷的形而上学的また宗教的なドイツを熱愛した」といい、ミシュレ自らは、「余はドイツを愛し、その偉大にして却つて雑純なものを愛する。即ちニイベルンゲンのドイツ、ルウタアのドイツ、ベートオフエンのドイツ、フレエベルのドイツを愛する。ゲーテの諷刺的ドイツを好まず、ヘーゲルの詭弁的ドイツを好まず」と言つたという。即ちミシュレのドイツ愛好、彼の史学の「ドイツ的」とは、如何にその意がギゾオその他の論証者の、ゲルマニスト・カンティアン・ヘーゲリアンと異なつていたかを知らしめる。<sup>(1)</sup>

猶グウチはミシュレをロマン派とし、これに対してギゾオ、ミネエ及びティエールを政治派としてゐるが、前記ステータ及びジョルヂ・ミュニエは、ティエリ・バラントを教訓派、ティエール・ミネエを宿命派、フステル・ド・クウランヂを科学派とし、ミシュレを観念派と稱しているが、これら分派はとにかく、ミシュレ史学が特異であつたこと、並びに理想的であつたことを顧る時、その史学の総合の意図従つて史料の批判が、何等かの特色を包含してゐたことを注意されるのである。<sup>(2)</sup>

(1) G. Lanson, Hist. de la littérature française.

(2) G. Meunier, Les grands historiens du 19<sup>e</sup> siècle.



ミシュレのドイツ愛好は詩であり信仰であり感情であり、彼が耽読したものはグリムの文学と、ヘルデルの哲学思想と、古くはニイプアの史書であった。概して言えば、ドイツの純素なイデアリズムとロマンティックの系流である。この思想と感情とに動かされ、ユマニテの自己生成の線に沿って、過程を劇的に観察し、時代の理念を象徴に於て表わし、史実を象徴を以て描かんとしたるもの、また総合せんとしたるもの、また総合観察を歴史発展の本質に識らうとしたものは、彼の天敏を以てするもので、正に最も優れたる歴史家と称せられる所以である。

彼がその『フランス史』のうちに、特にそのはじめに記したものは実にその史学の目的である。曰く「余の歴史の問題は、過去の完整的生命現象の再現として、課せられる。単にその外見のみでなく、内在する且つ奥深き組織そのものである」云々。(mon problème historique posé comme la résurrection de la vie intégrale du passé, non pas dans ses surfaces, mais dans ses organismes intérieurs et profonds) (cf. Meunier) 即ち彼は論証派を以て分析と無感覺との弊とし、敘述派を以って内面的生命を考えずとした。理念の拡充に於て解釈し、或は道義世界の建設に於て理論付けし、又或る觀念に立ち、ある標準例えば民族闘争や自然力の支配などの宿命論的なものは、彼の史学ではなかつた。

彼の史学に多くの影響を与えたヘルデルの、ユマニテが諸々の歴史過程を経て完成されるものとしたのとは異つて、ユマニテそれ自身が生成することを、歴史過程が反映するのを見ようとする。歴史は生成躍動する生命そのものであるとする。この完全な自己生成の生命の流れを、総合せんとすることを、彼の史学の目的とした。史学は彼に於ては、*une synthèse de la vie intégrale* である。生成躍動する生命の力の自由という觀念に従つて、彼はあらゆる宿命論的傾向の史学を非難したのである。

彼は人間性の自由な動作は、自然にも、神意にも、或は恒久の真理と称せられる如きものにも、制限されずとした。結局生命的自由が、物理的自然的また他の理性的或は神意的な拘束に対して、不断の闘争をなしつつあるものが歴史である

とするのである。実に彼のこの生命の流れを描かんとする意が、如何にむしろ芸術的であつたか、又直覺論的であつたかを、吾々に考えさせる。グウチはミシュレの最大の資性は、同時に欠点とも見られるものは、その「同情的構想」(sympathetic imagination)であるとし、且つ彼を以て史学に於けるヴィクトル・ユゴオであると云う。

## 六

然し斯の如き芸術的な、又或は宗教的な、歴史の内面に浸透する如き、所謂悟入の心境を以てしたミシュレの史学は、必ずしも全く史実に対する第三者的客観の全部を、失なつたと考えるべきではない。彼がグウチの所謂史学者中の最大の文学的芸術的史学者たる所以には、現象の相互関連、不可分的関係、相互反映について、却つて客観的觀察を以て始めとするものがあり、そして総合に必要な広汎な遺物伝承の範圍の涉猟が要求されるものがある。即ち事実上彼の研究は、従来見ざる史料の用意がありまたその使用が行なわれたのである。

そして所謂同情的構想が、一面に於て批判を「余りに早くさせた欠点を伴つたとは言え、それは研究の進歩を無限に延長させ、史料の内容の解釈に力強い働きとなつた。恰かも文書ならばその紙に対し生命あるものの如く見ることに、恰かもユゴオが事物を人間に変体するが如きに似ている」とジュリアンはいふ (transformisme)。斯の態度はまさにミシュレの「総合」の第一歩である。ミシュレのドイツ的感性的な研究に反対していたティエリイでも、それを「良心的にして又稀なる理解の研究」と言う<sup>1)</sup>。

テーマは「或時代の文書を研究する場合、科学研究のそれに似た感覺を苦惱するのである。彼れミシュレは自身を、この自在万能の存在に対して、類似させたかに見うけられる。あらゆる形態を捉え又あらゆる事態を転化させて彼自身をそこに優置させる。彼が觀察し尽す至るところに於て、彼はそれとともに生命と美とをもちたらずのである」と激賞してい

(2)

註(1) Thierry, *Considerations sur l'histoire de France*.

(2) Taine, *Essais de critique et d'histoire*.

更にミシュレ著作の各々について、上述に足らざるところを補うべきである。例えば近代史概説(一八二八)の次のロ  
ーマ共和政史(一八三一)、ついで中古期のフランス史(一八四七―五五)、文芸復興期と近世(一八五五―六二)、未  
完の十九世紀史(一八七二―七四、即ち没時の著作)更に感想作「山岳」の如き文学書をも省みるべきであり、リッタア  
またワイツの史学史を参照して(Moriz Ritter, *Entwicklg. ; Georg Waitz, Kritische Erforschung*)、所謂ミシュレ史  
学の *sensibilité, imagination, phantasie* を能く知るべきであるが、私は力足らずしてこれを擱筆し、後進の研究にまつ  
こととした。この一文は凡そ二十年前の旧記帳に由ったもので、参考文献図書に関することの掲記に必要な条件、年代出  
版地頁号等を欠き、頗る蕪雑な一家言となったことを恥じるものである。(昭和四十二年盛夏)